
原著論文

ラポール構築を基軸とした日本語会話の授業デザイン

木原直子^a

Effects of Rapport-Based Instructional Design in a Japanese Conversation Class

Naoko Kihara^a

(^aGraduate School of Human Sciences, Waseda University)

(Received : May 17, 2009 ; Accepted : January 20, 2010)

Abstract

In the foreign language (FL) classroom, the rapport between teacher and student affects learning experience and outcome; however, few studies have investigated how to construct an effective teacher-student rapport and what kind of teacher-student relationships generate desirable effects on learning outcome from the perspective of students. This action research collected the perceptions of sophomore-year or higher students majoring in Japanese at a university in Taiwan regarding the influence of the teacher-student rapport on learning. In addition, one of the main contributing factors to the teacher-student rapport, teachers knowing students individually and calling them by name, was analyzed from various perspectives. The results suggest that both the teacher-student rapport and memorizing and calling students' name indirectly influence students' learning outcome. Showing care and consideration by calling students' name satisfies students' affective side, while the teacher-student rapport prepares students for learning effectively by enhancing their motivation.

Key Words : learning environment design, rapport, name, foreign language class

1. はじめに

1.1 研究の背景

教師と学習者の関係、そして外国語会話のクラス雰囲気（もしくはクラス文化）が学習に大きく影響を及ぼす^{1,3}。適切なコンテンツを適切な方法で学習者に教えたとしても、学習者がそれを受け入れる心の準備ができていない場合、学習される量や質に影

響を及ぼす。それゆえ、教師が外国語としての日本語を授業で効果的に教えたいのであれば、学習者がより効率的に学べるような授業環境を整える必要がある。ラポールはポジティブな教室の雰囲気を形成する重要な要因の一つである¹。教室で言語を学ぶ状況では、教師と学習者の関係がきわめて重要であり⁵、学習者の動機づけには、教師・学習者間ラポール、特に教師の関与が重要である⁶。

^a 早稲田大学大学院人間科学研究科 (Graduate School of Human Science, Waseda University)

教育現場において、どのような教師の行動が学習者に信頼感を感じさせるかについて調査を行った佐竹⁷⁾の研究によると、抽出した因子は「尊重」「肯定的特質」「安定性」「明朗性」「親密性」であった。友好かつ相互信頼できる状況(ラポール)を構築するには、上記5つの因子が必要である。一斉授業において、学習者に教師が信頼できると思わせるには、信頼できると思わせる経験を積み重ねることにより可能であるが、学生一人一人と親睦を深めたり、関心を示すことは難しい。だが、授業外で一人一人とコミュニケーションをとったり、授業中であっても先生は自分のことを知っていると感じさせ、学習者にとって適切な授業内容を適切な授業スタイルで教えることにより、親睦を深めたり、関心を示すことはできる。

効果的な学習の為には、教師は、不安・反感・怒り等、学習を阻害する感情を取り除き、情意フィルター(心理的障害)を下げる必要がある⁸⁾。また、教師・学習者間ラポールを構築することにより、学習者は教師に対して恐怖心を抱くことを抑えることもできる。ラポールとは、友好的・相互信頼的な状況(関係)を意味するが、本研究では「効果的な教授・効果的な学習が可能になるような関係」を「教師・学習者間ラポール」(以下、「TSラポール」と呼ぶ。TSラポールは、学習を強化し、学習者を動機づけ、学習者の不安を下げることができると、Jiangら⁹⁾は一連の先行研究を分析した結果、このように結論づけている。

Murray¹⁰⁾のカナダの大学をフィールドとした調査では、まず学習者による授業評価をベースに54人の教師を高・中・下に均等にわけグループ化した。それから、トレーニングを受けた観察者は観察可能な教師の行動に関する60項目の出現頻度を評定者別に判断し、評定者間で信頼性が高い57の項目をその高・中・下のグループ間で比べた結果、ラポールに関して一元配置分散分析で統計的な差が出たのは、「学習者に関心を示す」、「学習者の名前を呼ぶ」、「困っている学生に手を差し伸べる」、「フレンドリーで話しやすい」であった。

情報提供型の授業とは異なり、外国語会話の授業では、理解だけでなく運用能力が求められる為、口頭練習が重要となってくる。口頭練習には、一斉授業のスタイルで教師主導の練習とクラスメートと一

緒に練習する2人で行うペアワークと数人で行うグループワークがある。その為、授業に影響を与える要因として教師学生間ラポールだけでなく、学生間ラポールも重要となってくる¹²⁾が、本稿では教師の影響が大きい教師学生間ラポールに着目する。

教師が学習者に対して働きかけることができるのは、授業内と授業外の二つがあるが、本稿では教師の影響力が強い授業内に主に焦点を当てる。授業中、教師が学習者へ与えるインパクトとして、授業内容に直接関係するもの(例:教材、教授スタイル)と間接的に関係するもの(例:ラポール、授業の雰囲気)があるが、本稿では後者のラポール、特にTSラポールに焦点を当てる。

TSラポールに焦点を当てたアクション・リサーチは非常に少ない。TSラポールの重要性が示唆されたMurray¹⁰⁾や顔ら¹¹⁾の論文は、探索的因子分析で全体的な傾向を捉えているが、具体的にどのようにしたらそのような人間関係を築くことができるのかなどについては言及していない。

そこで、本研究では、これらの量的調査の知見をベースに、外国語として日本語を学習している日本語専攻者の会話のクラスをフィールドとし、TSラポールが日本語専攻者にどのような影響を与えているのか、そしてラポール構築に影響を与える名前に関して、様々なデータや分析手法を用いて、多角的にラポールと名前に関して知識を深めることを目的とする。

1.2 ラポール構築を重視した日本語会話の授業デザイン

担当教師(筆者、以下「教師」)が、学習者とラポール構築を意図して実践した主要内容を図1に示す。二つの楕円が重なり合っている箇所は、授業時間内・時間外を問わず実践した内容であり、学習者が自分で選んだ日本語名もしくは日本語のニックネーム(以下、「日本語名」で統一)[注1]を教師が覚え、その名前を呼ぶことである。

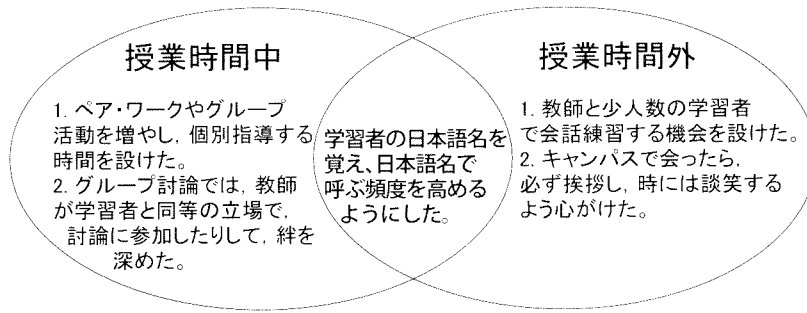


図1 TS（教師・学習者間の）ラポールを構築する為に教師が行った主要実践内容

2. 調査1：日本語名に関する調査

2.1 目的

学習者が自分で選んだ日本語名で呼ばれることに対して、どのように認識しているのかの全体像をつかむ。

2.2 方法

2.2.1 協力者

台北の大学（A大学）で2年次もしくは3年次の会話を受講した日本語専攻者56名（男性12名&女性44名）。

2.2.2 手続き

担当教師（筆者）は名前を覚える重要性を認識し、学期の早い段階で顔と名前が一致し、名前を覚えられるよう、初回の授業でクラスの写真を撮り、名前を覚えるよう努力した。また、授業内外を問わず、極力、学習者の日本語名を呼ぶという実践を16週間以上（週2時間の授業）続けた後、質問紙調査を依頼し協力してもらった。

2.2.3 調査内容

「中国語で名前を呼ばれず日本語の名前（もしくはニックネーム）で呼ばれることについて、どう思うか」という問いに関して下記の細分化された3つの質問をし、五段階評定（5：非常にそう思う～1：全然そう思わない）で選んでもらった。細分化された問いとは、日本語名で呼ばれることにより、（1）日本語をもっと勉強しようという気になる、（2）日本人の行動・習慣・考え方を理解しようという気になる、（3）日本語の名前・ニックネー

ムで呼ばれた方が良い（うれしい）、の3点であった。

2.3 結果

2年2学期終了時、3年1学期終了時、3年2学期終了時の学生（独立したサンプル）をKruskal Wallis検定で比較したところ、有意確率は「勉強する気になる（以下、study）」が $p=.038$, $p<.05$, 「理解する気になる（以下、understand）」が $p=.644$, *n.s.*, 「良い（嬉しい）（以下、happy）」 $p=.722$, *n.s.*であった。studyの等級平均数を見ると、3年1学期終了時のクラスと2学期終了時のクラスはほぼ同じであったが（順に31.10, 31.47）、2年のクラスは18.42と著しく低い数値を示しており、学年が上がるにつれ、日本語名で呼ばれた場合、学習する気になる学生が増える可能性を示唆している。また、understandとhappyに関しては、統計的に有意的な差が見られず、似た傾向にあった。

図2はこれらを統合したデータの記述統計である。全ての項目は4以上の結果であり、全体的に支持されていることが覗える。平均値は高い順にhappy, understand, studyであり、happyは分布の幅が狭く、studyは幅が広いことを表1の結果が示している。

フリードマン検定の結果、漸近有意確率は0.00で、各質問に対する反応に有意差がないとする帰無仮説を1%水準（ $p\leq.01$ ）で棄却する結果となり、各項目間に学習者の認識の差異が確認された。ミクロレベルで各票の回答内容を検討したところ、study, understand, happyの平均値も大きく異なったが、必ずしもstudyを高く評価した人が他の2項目を高く評価しているということもなく、回答に様々なパターンが見られ個人差が見られた。

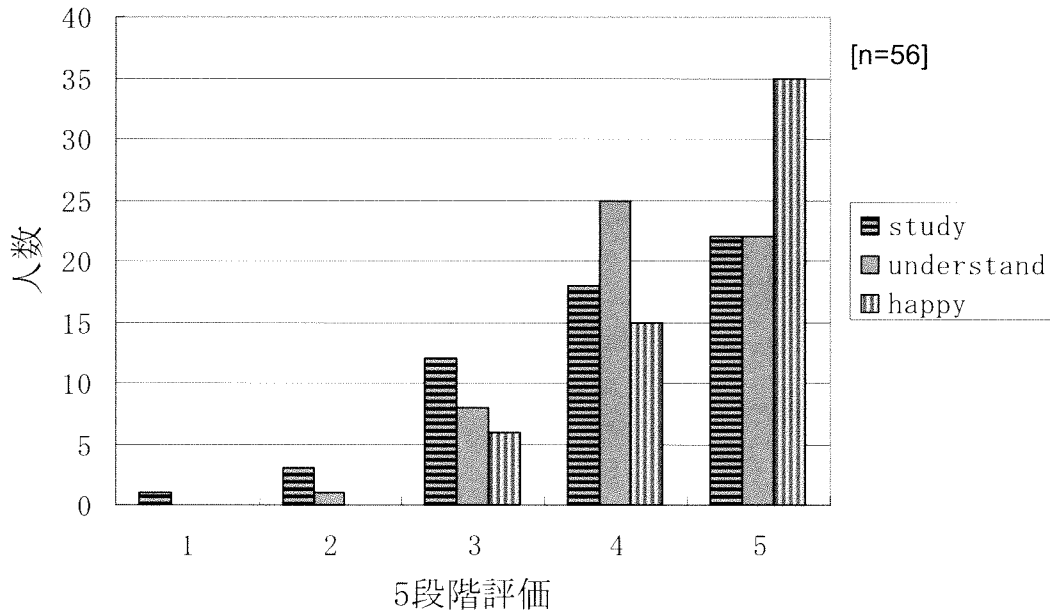


図2 日本語名が及ぼす心理的影響

また、男女差をマン・ホイットニーのU検定で調べたところ、study, understand, happyの有意確率が順に.393, .165, .103であり、いずれの項目も有意には至らなかった。男性のサンプル数が少なすぎるので、この男女差の比較は参考程度であるが、いずれの項目においても女性の方が肯定的に捉えていた。

以上の結果をまとめると、勉強する気 (study)、理解する気 (understand)、良い (嬉しい) (happy) という3項目間に学習者の考えの違いがフリードマン検定の結果、浮き彫りになったが、男女差はマン・ホイットニーのU検定の結果、統計的な差は顕著ではなかった。

3. 調査2：名前とラポールに関する調査

3.1 目的

調査1ではクローズ質問であったが、調査2ではオープン質問（記述式）を採用し、極力自然な状態で学習者の認識を集め理解することを目的に計画された。調査2での目的は二つあり、(1) 調査1とは異なる角度から見た名前についてと (2) ラポールについてである。

調査1では、日本語名で呼ばれることが学習者の情意面にポジティブな影響を及ぼすことがわかった。しかし、呼ぶ人の属性（日本人教師、台湾人教師、クラスメート）により、日本語名で呼ばれることに

対する反応が変わるかもしれない。また、日本語名で呼ばれることがポイントではなく、名前を覚えてもらい呼んでもらえること自体が大きな意味を持つかもしれない。調査2では、これらの名前に関する疑問点とラポールについて調査した。

3.2 方法

3.2.1 協力者

A大学で日本語会話4（4年次の会話）の授業を受講し、授業最終日に出席し協力してくれた日本語専攻者39名である [注2]。

3.2.2 手続き

担当教師（筆者）がラポール構築を意識しながら、1年以上、週一回2時間の会話の授業を担当した。早い段階で学習者の日本語名を覚え、呼ぶようにし、授業時間外に少人数の会話練習を一緒にしたり、授業中に小グループで行う会話練習に同等の立場（メンバー）として話し合いに参加したりして、時間をかけてラポールを構築し、その後アンケート調査に協力してもらった。

3.2.3 調査内容

調査は、1) 教師と学習者の関係性(ラポール)、2) 名前の2点についてなされた。

ラポールに関しては、「教師との関係があなたの

学習に影響を及ぼす場合、どんな関係だとどのような影響を及ぼすか教えてください」という問いに、自由記述で答えてもらった。

名前に関しては、文章完成スタイルの形式をとり、以下の文章を自由に記述することで完成してもらった。① 教師が自分の名前を知っているのは ()；② 日本人教師から、中国語の名前でなく、日本語の名前（ニックネーム）で呼ばれるのは ()；③ 台湾人教師から、日本語の名前（ニックネーム）で呼ばれるのは ()；④日本語学科のクラスメートから、日本語の名前（ニックネーム）で呼ばれるのは ()。

3.3 結果

3.3.1 ラポールは学習者の学習に影響を与えるか？

影響を及ぼさないと記述した人は一人もいなかったが、無回答が一人、「まだわかりません」が一人、「まだ思いついていません」が一人いた。つまり、39人中36人（92%）は、影響を与えると答えていた。

3.3.2 教師学習者間の関係が学習者の学習に対してどのような影響を及ぼすか？

収集した39票の内、質問に関連する因果関係が書かれた、28人分を分析した [注3]。内5人は、因果関係を二つ書いていたので、一つの因果関係を一つとしてカウントし、33の因果関係を分析対象と

表1 KJ法による教師・学習者間の関係が学習に及ぼす影響のタイプ

グループ名	関係数	概要
関係良好	10	この項目は大きく分かれて二つあり、一つは「いい関係」の場合で、もう一つは「教師との仲がいい場合」であった。前者の場合、学習意欲が高まったり、教師が怖くなくなり質問ができるようになったりするようである。後者の場合、学習意欲が高まるというのが主だが、学習が楽に効果的にできるようになると答えた学生もいた。
教授法・教授スタイル	8	全体的に活発な教え方でインターラクティブな授業で面白いと感じる授業には集中力が高まり学習効果が上がると考えているようである。また、学習者が教師の教授スタイルに適応できる場合、多く学べると考えている学生もいた。最後に、教師が学習者の緊張感を取り除く工夫をすると、話す意欲がわくと答えた学生が二人いた。具体的には「何を話しても構わない」「文法間違えても構わない」と教師が言ってくれたり、優しく親切に教えると効果的だと感じていたようだ。
性格	3	教師の性格・態度・行動が学習者の性格に影響を与える例が見受けられた。
好意	3	教師に好意を持っている場合、学習意欲が高まったり、授業を受けたいという気持ちが高まり、効果的な学習に結びつくと考えているようであった。
厳格さ・怖さ	2	厳格すぎるとクラスへの興味が低くなったり、怖くて質問できなくなったりするようだ。
教師の無関心	2	教師が自分のことを全然知らないと寂しさを感じ発言したくなくなるというケースと、教師と関わりが無い場合クラスへの興味が薄れると答えたケースがあった。
会話練習	2	教師と一緒に会話練習をすると話したい気持ちが高まると答えた学生は、その理由として教師は自分が言いたいことをわかってくれ、まとめてくれると答えていた。その為、一生懸命話をしても通じなかったり、教師の能力を疑問視する場合、このような効果は現れない可能性がある。また、楽しく会話ができると会話力が上昇すると答えた学生は、恐らく楽しく会話練習できることにより、話したいという気持ちが強まり、実際に話す量が増え、その過程で会話能力が高まると考えていると思われる。
高能力	1	いい教師というのは、学習意欲を高める教師と認識している学生がいた。また、学習意欲を高めるような授業をする教師を求めている表われというふうにもとれる。
低能力	1	「発音が怪しいと聞きたくなくなる」と学習者が答えており、学習者が教師の能力に疑問を抱く時、その教師の授業に対する学習意欲は低くなることが予想される。
教師の国籍	1	日本人教師の場合、聞く力と話す力が高まると考えている学生がいた。

した。この因果関係の因の部分に基づきKJ法により、グループ分けした結果、10のグループに分けられた(表1)。それらのグループを更に大きなグループにまとめると、教師と学習者の関係性について記述したグループ(「関係良好」と主に教師個人に関連するグループ(「関係良好」以外のグループ))に大別できた。

次に従属変数の部分に着目すると、いい関係の場合は授業に出たい気持ち・話す意欲・質問する意欲のように学習意欲を向上させたり、自尊心の向上や怖さからの解放等が挙げられていた。否定的な関係では、聞きたくなくなったり、その教師や授業に興味をもてなくなったりするという意見が挙げられていた。

以上の関係をまとめると、教師の信念・態度・行動がラポール、学習者の感情(怖さ、自信等)、学習意欲、学習効率に影響を及ぼす。ラポールは、主として学習意欲が高まる等の学習者の態度や質問する等の行動に影響を及ぼす。

(1) 「教師の態度・行動」が及ぼす影響

教師の態度や行動は、学習者が授業内容に専念できるか、学習意欲を喚起させられるかに影響を及ぼす。アクティブな授業(s20)(注:カッコ内は協力者番号を指す。番号の後ろに-1もしくは-2が続いている場合、順に二つ目、三つ目のコメントという意)や、インターラクティブな授業(s16)だと集中して授業を受けられる。また「授業内容が生き生きして面白いものでない場合、つまらなくなり授業に専念できない」(s29-2)という意見があった。効果的な学習を促す為にも、学習者の集中力を高め持続させるような教師の努力が求められる。

上記のように、学習者が集中できるか否かに影響を与えるだけでなく、学習意欲を喚起するかどうかについても意見が述べられていた。「先生がやさしく親切に教えると、私は緊張しません。学習意欲が強くなります」(s7)のコメントが示すように、学習者の緊張を解き、学習者が心を開いて努力し上達しようという気持ちになれるよう、学習者の情意面をケアする必要性を感じさせるコメントである。先生が「何を話しても構いません」(s38-1)、「文法が間違えてもいいからね」(s38-2)とってくれることで、話す意欲が高まると言っている。このコメン

トから、教師が学習者の話している内容をネガティブに捉えたり、間違いを指摘することが、学習者に話す意欲を失わせてしまい、練習機会を奪ってしまう可能性を示唆している。また、「先生が好きになったら、その授業を受けたくなくなります。そして学習の効果もできると思います(#21)」のコメントは、学習意欲を喚起するだけでなく、教師に好意を抱き、高く動機づけられている状態で授業に参加することで、効果的な学習が期待できると、この学習者は考えている。

(2) 「ラポール」が及ぼす影響

教師との関係がいい、仲良くなる、友達のような関係だと、学習にポジティブな影響があると答えた学生は7人(全体の18%)であった。そのうちの二人は、「教師が恐くなくなり、自発的に質問をするようになる」(s23)「質問があったら、遠慮なく聞ける」(s27_2)と質問に関して述べていた。逆に関わりがあまり無かったり、自分のことを全然知らなかったり、教師という一段高いところから構え厳格な場合、その教師やその教師が教える科目への学習意欲が下がるようである(例:「授業中発言しなくなる」(s13)。また、好きな教師の場合、授業に出たくなり、効果的に学習できる(s9)と考えている。このような学習意欲は、出席回数が増えるという学習の量の向上だけでなく、高い集中力をもって授業に望むという質の向上につながる。似たような回答に、友達みたいな関係なら楽に効率よく学習できるようになる(s34_1)という意見があった。

(3) 「怖さダウン&自尊心アップ」への影響

ラポールは教師に対する恐れを低減し、自信や自尊心も高める可能性があるようである。学習者が書いた「怖い」というのは、大きな不安を意味していると思われる。「先生がこわいなら、問題を聞くことが怖くなる」(s34_2)、つまり先生から批判・叱責されることを予測した場合、学習者はわからないところも先生に聞くことができない。学習者が気軽に聞けるようなラポールと聞きやすい状況(例えば机間指導を取り入れ、質問があったら気軽に聞いてくれというメッセージを伝える等)を創り出すことで、学習成果という効果面においても学習意欲という情意面においてもプラスに働く。ある学生(s23)

は、「教師と良い関係を保持すると、教師が恐くなくなり、自発的に質問をするようになる」と (s34_2) と同じく、怖いという感情があると質問をしにくくなることを示唆し、その解決策として教師と良い関係を保持することとしている。

また、教師の性格 (例：朗らかな性格) (s2) やポジティブな態度 (s31) が深く影響を及ぼし、自尊心を高めるのに役立っているようである。授業で教師と対峙することで、積極的になったりと授業内容以外の学習者が自分の成長を感じた人が3人いた。教師の性格や態度でポジティブな影響を受けた学生は、その教師に好意を抱き、授業内容に集中的に取り組む、効率よく学んだことが予想される。

「教師が日本人の場合、聞く能力と会話能力はもっと上手になる」 (#12) と答えた学生は、「いつも日本人と話すことで他の日本人と話す時、自信をもって話せる」、と書いていた。自分と同じ母国語 (中国語) を話す教師に目標言語 (日本語) で話すのは恥ずかしかったり、慣れなかったりするからだと考えられる。台湾人教師であっても、授業外で学習者が教師に話す言語は日本語でも中国語でもOK、ただ日本語の方が上達するから極力日本語でがんばろう」というメッセージを台湾人教師が伝え、柔軟に対応することにより、より多く日本語会話の練習をしたいという学習者の方も照れが低減され、日本語で会話する練習の機会が増えるのではなかろうか。

3.3.3. 「教師が名前を覚えていること」に関して、学習者はどのように認識しているのか？

教師が学習者の名前を知っていることに関しては、(回答方法に誤りのある一人を除いた) 38人中33人 (87%) が「嬉しい」「楽しい」と回答しており、その他は「当然・当たり前」が二人、「先生にとって便利」が一人、「大丈夫」が一人、「びっくり」が一人であった。教師が学習者の名前を知り、きちんと名前と呼ぶことが、学習者に肯定的な感情をもたらすことが明確であり、教師学生間ラポールを築く上でも重要である。

3.3.4. 日本語名で呼ぶ人の属性による認識の違いはあるか？

次に、回答方法に誤りのある二人を除いた37人を分析したところ、日本語名を呼ばれる場合、日本語

教師 (以下, JPT)・台湾人教師 (以下, TWT)・クラスメート (以下, classmates) が呼ぶ場合、それぞれ聞いたところ、「嬉しい」「親切」と答えたのは順に65%, 24%, 35%であった。その他の回答は日本人教師の場合「いい」「OK」等で否定的な回答は無かったのに対し、「変」「怪しい」等答えたのは台湾人教師で14%, クラスメートで5%であった。いずれの場合も、「いいけど変」「ちょっと変」という回答が多く、日本語名を呼ばれることで学習者に不快に思わせるような回答はなかった。また「気にしない」「名前は重要ではない」という回答もあった。

3.4 考察

3.4.1. ラポールに関する示唆

「学習は学習環境により大きく影響を受ける」というのは多くの学者が認めるところだが、Williams & Burden¹⁾は殆どの学者の考えとは異なり、直接影響するのではなく、「間接的に」影響すると考えている。学習環境の主要の一部であるラポールに関する本稿の結果は、Williams & Burdenの考えを支持するもので、「どのような関係がどのような影響」という問いに対する自由記述による回答に関しては、間接的に学習成果につながるものが多かった。ラポールが構築されることにより、授業に出席する回数が増え、授業における学習意欲が高まり集中力が高まる結果、効率よく学習できるようである。倉八¹³⁾は「1980年代後半から今日までの研究で明らかになったことは、学習意欲と学習成果を規定する媒介変数として、客観的指標である学習への積極的関与が示されたこと」と述べた先行研究知見と本稿の結果を合わせると、TSラポールは学習意欲と積極的関与にポジティブな影響を及ぼし、最終的には学習成果にも間接的に影響を及ぼすということが出来る。

情意面全般に関しては、Ellis¹⁴⁾も学習者の情意面の状況が学習成果に大きく関わるとしている。また、情意的要因の研究例として、神山¹⁵⁾は「生徒は教師の語学力に満足している場合よりも、教師との人間関係に満足している場合の方が成績が向上し、両者間に相関がある」という高塚 (1979) の研究知見を紹介している。

ただラポールが築かれていれば、授業中における集中度が高まり効果的に学習できるというのではなく、教授方法・教授スタイルが直接インパクトを

与えるようである。(例:「教師の教授法に適応できれば多くのことを学べる」(#29_1, 筆者訳)ラポールはあくまで間接的であり、授業に集中する心の準備を整える役割(もしくは効果的に学習する為の環境整備の役割)を果たしている(例:「先生が好きになったら、その先生の授業を受けたくります」、「先生と学生は仲良くなるなら、授業を出る意欲はアップすると思います。そして、効率もアップできる。どちらでも、授業を楽しみにしていると思います」)。WilliamとBurden¹によれば、フレンドリーで理解を示すことだけでなく、リーダーシップを発揮することが重要だと述べている。ポジティブな教室の雰囲気を作成するには、教師はラポールを形成し、賞賛と批判を適切に用い、教師の活力で学習者を感化することが必要だとBrown¹は考えている。また、Noels¹⁶も教師は学習者の学習の上達に責任感をもって取り組んでいることを学習者に認識させる重要性を述べている。「教師の行動が学習者にどのように認識されるかが学習者の学習成果に紛れもなく影響を及ぼす」とWilliamsとBurden¹は学習環境の一部としての教師の行動をそのように見ている。つまり、適切な教師の信念・態度だけでなく、学習者に教師の意図が伝わるような行動・コミュニケーション能力が求められるのだ。

3.4.2 ラポールに関する要因としての名前に関する示唆

本章では、異なる角度からデータを分析してみる。オープン質問のデータを学習者の考えが肯定的か中立的か否定的かのいずれかにグループ分けをしたデータに変換し、そのデータで男女差があるか、各項目をマンホイットニー検定で調べたところ、 p 値(両側)は順に0.452(knowing), 0.071(JPT), 0.323(TWT), 0.563(classmates)であり、95%信頼区間で統計的男女差はなかったものの、日本人教師が日本語名で呼ぶことについて比較的明白な差が見られた。

Spolsky¹⁷は、ヒトを何者であるかのカテゴリーに分ける時に最も良く使われる手段の一つとして「言語」を挙げており、「同じ言葉を話す社会グループがその人にとっての重要なアイデンティティのグループである」と述べている。目標言語の母語話者からその言葉の名前で呼ばれることにより、自分が

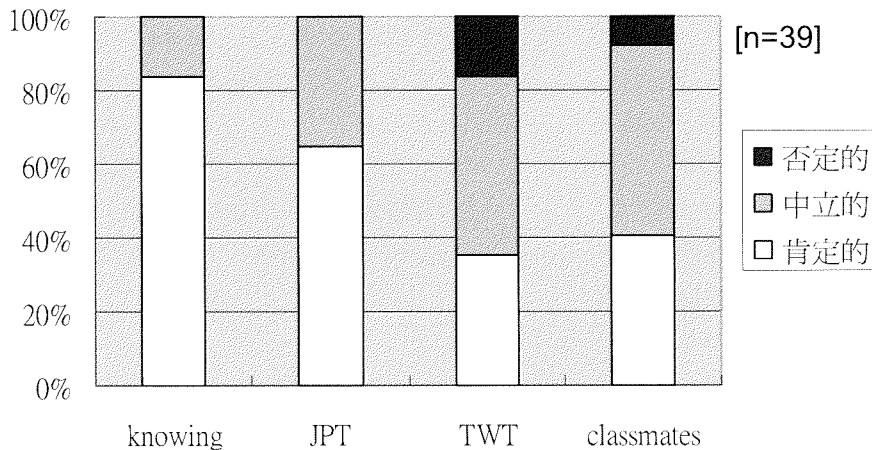
その目標言語の社会グループから同じグループの仲間として認識されていると感じることから、「嬉しい」といった感情につながるであろう。もしも、その目標言語やその言葉を話す母語話者や社会に対して否定的な感情を持っていた場合、その目標言語名で呼ばれることに対してネガティブな感情が生まれると思われる。

次に、知っているというのに対し、発話者のタイプにより差が見られるかどうかウィルコクソンの符号つき順位和検定で、 p 値(両側)で調べたところ、 p 値が順に.035, .000, .000であり、差が統計的に有意であった。つまり、どんな名前を覚えているということよりも、覚えてくれているかどうかのポイントだと考える学生が多いことを示している。

この「名前を知っていること」の重要性を示した結果は、カナダの大学生がラポール(その構成因子の一つが「名前」)を重視しているというMurray¹⁰の研究知見を間接的に支持している。つまり、名前を覚え、名前と呼ぶことの重要性、ひいてはクラスの一斉授業であっても、ヒトとヒトのつながりの基にクラスが成り立っており、ヒトとヒトが対峙して教え学び交流する重要性¹⁸を示唆している。

最後に、4つの項目間の違いをフリードマン検定で調べたところ、 $p < .001$ で有意であったので、一つ一つペアにして調べた。結果、JPT-TWT(日本人教師—台湾人教師)間、TWT-classmates(台湾人教師—クラスメート)間、JPT-classmates(日本人教師—クラスメート)間をウィルコクソンの符号つき順位和検定で調べたところ、 p 値(両側)は順に.000, .265, .003であり、台湾人学習者は日本人と台湾人を区別して考える傾向にあることがわかった。

図3は各項目の考え方の分布を表している。否定的と言っても、「嫌だ」「他の呼びの方がいい」といった直接的な拒絶というような回答はなく、全てにおいて「慣れない(s29)」「かまわないけど、ちょっと変(s37)」といったレベルのものであった。中立的な回答の例は、「日本語学科らしい(s26)」、「日本語名は読みやすい(s10)」、「もう慣れた(s35)」といった感想もあるが「OK」「大丈夫」「どちらでも」といった中立的な回答が大半であった。肯定的な回答は、「嬉しい」「親切」「楽しくなる」「いい」が主流であったが、一部「すごく嬉しい(s32)」「とても



注： knowing は「教師が自分の名前を知っているのは（ ）」の問いに対する答えが肯定的か中立的か否定的かで表してある。JPTは「日本人教師（JPT）から、中国語の名前でなく、日本語名（ニックネーム）で呼ばれるのは（ ）」であり、TWTは台湾人教師，classmatesはクラスメートである。

図3 名前に関するオープン質問の答えを3段階に分類した表

嬉しい(s14)」「嬉しい。親しく感じられる(s27)」「親しみを覚える(s39)」等、非常に肯定的に捉えていた回答もあった。

発話者のタイプが異なることで、学習者の反応が異なるかどうか一人一人調べた結果、人数が多い順に、好意度に差が見られないグループ(18人; 49%)、日本人教師により好意的なグループ(10人; 27%)、日本語教師とクラスメートにより好意的なグループ(4人; 11%)、そして教師により好意的なグループと学生により好意的なグループが同数で各グループ2人ずつ(各5%)という結果であった。ここで興味深いのは、日本人教師が日本語名で呼ぶ場合、「嬉しい」「親切」といったイメージに主につながるのに対し、クラスメートの場合、そのようなイメージの他に、「楽しくて日本語を話したくなる(s21)」「面白い(s22)」等、他の対象者には出てこなかったコメントがあり、学習者同士が楽しんでいる様子が垣間見られた。言語は自集団の凝集性を強める役割¹⁹⁾があり、日本語名が仲間としての結束力を強める働きをしていると考えられる。それと同時に、日本人教師に言われると嬉しいけど、クラスメートに言われても冷めているケースも見受けられ、個人差があることを感じさせる結果でもあった。

4. 結論と今後の課題

本稿で効果的な学びを実現する学習環境を整える

という意味においてのラポールの重要性が示された。また、名前がラポール構築に役立ち、学習者の情意面を満足させる役割をしていることが明らかになった。

本研究の限界としては、リサーチクエスチョンを解明する為のデータは質問紙調査からであり、行動指標や学習意欲や成果の度合いなどが測られていない。このような、学習者の感覚というものは、学習者を取り巻く環境(文化)や学習者の過去の体験など多くの変数により、回答が左右されてしまうという点も否定できない。だからこそ、ラポールの重要性は声高に主張されても、実践研究はなされてこなかったのだろう。

本稿では、授業実践者の長年の観察による発見・気づきを基にリサーチ・クエスチョンとし、なるべく自然な状況でデータを入手することを試みた。協力者は、一定期間、日本語学科で学び、様々な日本語の先生と接したことがある学生であり、調査1(名前のクローズ質問)では、約2年半、調査2(名前とラポールのオープン質問)では、約3年半、日本語学科に在籍した学生である。様々な日本語の先生の授業を受けてきた学生だからこそ、様々な角度からの質問に対し、適切な回答がなされる可能性が高い。本稿は、その回答を質的・量的に様々な角度から眺めることで、ラポール・名前の役割・有用性に関する全体像を提示した。また、実践者が応用しや

すように、学習者の考え（認識）を数多く引用し、詳細かつ正確に記述し分析した。

外国語教師を選抜・評価する際、学習者の視点も考慮する必要がある。具体的には、専門的な知識・教授能力のみならず、TSラポール構築をベースとした学習者に楽しく効率よく学ばせる環境づくりができるか、学習者に適切な教授内容・教授方法を選択し実施できるか等、日本語教師採用・評価する側が、これらの方面の重要性を認識し、そのようなプロ意識の高い教員に授業を任せることができれば、学習者にとって充実した授業に参加する可能性が高まると思われる。

[注]

[注1] 本稿でいう「日本語名」とは、日本語の名前もしくは日本語のニックネームのことで、学習者が自分で選んだ日本語名である。具体的な名前の例としては、「なおき」「みなみ」のような日本語名もあれば、中国語で呼ばれているニックネームを日本語にしたような「さかな」「パン」等もあり、共通点は学習者自身が納得して選んだという点である。日本語名で呼ぶことを強制せず、中国語名で呼んでほしい人には中国語名で呼ぶことを伝えたが、本稿の協力者の中で中国語名で呼んでほしいという学生がいなかったため、協力者全員に対して日本語名で呼ぶことになった。なお、担当教師（筆者）はラポールや日本語名や授業後の会話練習が学習者の外国語学習に肯定的な影響を与えることに気づき、授業での実践を通じてその認識を強めていった。学習者が実際どのように考えているのかを正確に把握する為に、本稿にまとめた一連の調査を実施することにした。

[注2] 39人中36人の調査2の協力者は、調査2実施の1年前もしくは1年半前にも調査1に協力してくれた学生である。彼（女）達は、会話4の授業の他にも、担当教師がラポールを重視して実践した会話の授業を約1年間受講した学生である。

[注3] 39人の内、11人は質問に関連した因果関係が書かれていない為、取り除いたが、その内訳は言いたいことが何となくわかるが関係が書かれていない為排除したもの（例：「比較的話すようになる（s24）」「自分の積極性がアップします（s26）」）が4票、空白もしくは考えつかないが3

票、影響なしが2票、その他が2票であった。注目すべき点は、影響なしと答えた人が2人（5%）いたことと、「友人関係や成績に関係しない時、勉強したくなる。…私だけです（s1）」と答えた人がいたことであった。純粋に日本語を勉強したい（内発的動機づけがされている）が、その他の要因が動機づけを阻害していると考えられる。

[文献]

- ¹ Williams, M. & Burden, R. L. (1997). *Psychology for Language Teachers: A Social Constructivist Approach*. Cambridge: Cambridge University Press. 196-202.
- ² Arnold, J. and Brown, H. D. (1999). A map of the terrain. In Arnold, J. (Eds.). *Affect in language learning*. Cambridge: Cambridge University Press. Part A, 2: 1-24.
- ³ 尾崎明人 (2002). 日本語教師のエンカレッジメントとディスカレッジメント. (細川英雄 (編)). *ことばと文化を結ぶ日本語教育を目指して*. 凡人社. 第12章)
- ⁴ Brown, H. D. (1994). *Teaching by principles*. NJ: Prentice Hall. 421-422.
- ⁵ Nguyen, H. T. (2007). Rapport Building in Language Instruction: A Microanalysis of the Multiple Resources in Teacher Talk. *Language and Education*, **21** (4), 284-303.
- ⁶ Skinner, E. A., & Belmont, M. J. (1993). Motivation in the Classroom: Reciprocal Effects of Teacher Behavior and Student Engagement Across the School Year. *Journal of Educational Psychology*, **85**, 571-571.
- ⁷ 佐竹圭介 (2003). 教育現場における教師に対する生徒の信頼感の研究. *九州大学心理学研究*, **4**, 195-201.
- ⁸ Krashen, S. D., & Terrell, T. D. (1983). *The Natural Approach: Language Acquisition in the Classroom*. NY: Prentice Hall Inc., Maxwell House. 37-39.
- ⁹ Jiang, W., & Ramsay, G. (2005). Rapport-Building through Call in Teaching Chinese as a Foreign Language: An Exploratory

- Study. *Language, Learning & Technology*, **9** (2), 47-64.
- ¹⁰ Murray, H. G. (1983). Low-Inference Classroom Teaching Behaviors and Student Ratings of College Teaching Effectiveness. *Journal of Educational Psychology*, **75** (1), 138-149.
- ¹¹ 顔幸月, 渡部倫子, 小林朋子, 縫部義憲 (2007). 台湾の大学生が求める日本語教師の行動特性. *日本語教育* (133), 67-76.
- ¹² 吉田道雄&山下一郎 (1987). 児童・生徒の学習意欲に影響を及ぼす要因と現職教師の認知. *教育心理学研究*, **35** (4), 309-317.
- ¹³ 倉八順子 (1998). *コミュニケーション中心の教授法と学習意欲*: 風間書房, 23.
- ¹⁴ Ellis, R. (1994). *The Study of Second Language Acquisition*. Oxford: Oxford University Press. 485.
- ¹⁵ 神山正人. (1999). *外国語学習と情意的要因*: 近代文芸社, 41.
- ¹⁶ Noels, K. A. (2001). Learning Spanish as a second language: Learners' orientations and perceptions of their teachers' communication style. *Language Learning*, **51** (1), 107-144.
- ¹⁷ Spolsky, B. (1998). *Sociolinguistics*. Oxford: Oxford University Press. 57.
- ¹⁸ 野嶋栄一郎 (2002). ヒトとヒトが対峙する関係とコンピュータとヒトの関係 (野嶋栄一郎 (編著). 教育実践を記述する 金子書房, 41-48.)
- ¹⁹ 岡崎眸 (2002). 内容重視の日本語教育. (細川英雄 (編). *ことばと文化を結ぶ日本語教育を目指して*, 凡人社, 第4章)